

# 「令和元年度ふくしま『学びのスタンダード』推進事業」推進地域の取組

パイロット校名	桑折町立醸芳中学校, 醸芳小学校
推進協力校名	桑折町立睦合小学校, 半田醸芳小学校, 伊達崎小学校

## 「桑折町の15歳のめざす姿」に向けて

### 1 推進地域における「授業スタンダード」の活用について

県教委から授業構想・実践のポイントである「授業スタンダード」が提供されて3年、町内の各学校では授業改善に向けて研究会が日常的に実施されるようになった。授業の各段階における教師側からの視点を、児童・生徒の思考過程に合わせてどのようにコーディネートしていくか事後研究会の話題になっていた。本町では秋田の探究型授業を取り入れた学習活動を目指してきただけに、「授業スタンダード」により各校の研究内容は一層明確になった。

#### (1) パイロット校Ⅰ（中学校）における取組

##### ① 「授業スタンダード」の自校化

福島県の「授業スタンダード」をもとにして、授業の目標の明確化や生徒の主体性を引き出す教材の工夫、問題解決的な学習指導過程の工夫を重点に、現職教育と関連させながら取り組んでいる。特に、学習過程については秋田県の探究型授業の取組を参考に、全教科において「学習の見通しをもつ」「自分の考えをもつ」「ペア・グループ・学級で話し合う」「学習内容や学習方法を振り返る」の4つのステップを基本として授業を展開している。そして、それらの成果を生徒と教師のアンケートの結果から変容を捉え、検証を行っている。

学年	1組	2組	3組	教員人数
第3学年	C D	C B	C A	2名
第2学年	B D	B C	B A	2名
第1学年	A D	A C	A B	2名

・全学年全学級全時間TT指導  
・T1, T2の役割はなるべく固定しない。

##### ② 数学科におけるタテ持ちの指導体制の実践

本校数学科4名の教員が全ての学年に関わり、指導方法の共有を図りながら協同して授業づくりを行った。また、数学科部会を時間割に位置付けて情報共有を図り、指導法の改善や個に応じた具体的な働きかけの話合いを行った。平成29年度はTT指導によるタテ持ち、平成30年度は全学年習熟度別学習によるタテ持ち、令和元年度は全学年全学級全時間TT指導によるタテ持ちを実施した。

#### (2) パイロット校Ⅱ（小学校）における取組

「授業スタンダード」に基づいた共通実践として、課題設定や見通しのもとせ方を工夫した導入の在り方、児童の学び合う活動を活発にするコーディネートの在り方に視点を当てて授業研究を進め、効果的な手だてを検証することにより授業力の向上を図った。



##### ① 指導体制の確立

教員の専門性を生かした深い教材研究による質の高い授業を実現するために、一部で右表のような教科担任制を導入した。

##### ② 推進教師の具体的な取組

校内研修の活性化を図るため、授業研究会の運営等について組織的な取組に向けた計画

5年1組	5年2組	3年1組	6年1組	6年2組	
算数T1 1組担任	推進教師 2組担任	教頭	国語科(書写)の授業を担当		
算数T2	推進教師				
5年1組	5年2組	4年1組	4年2組	6年1組	6年2組
教務主任	理科の授業を担当	教務主任	図画工作科の授業を担当		

(様式1)

立案，調整，集約を行った。また，研修だよりを発行し，授業研究の成果や課題等の周知を図ることにより，「授業スタンダード」に基づく授業改善の視点を明確にした。全国学力・学習状況調査等の結果から本校児童の学力の実態を分析するとともに，対策を検討し，次年度に向けて具体的に取り組むようにした。

## 2 パイロット校の取組内容

### (1) 互見授業の計画的実施

互見授業週間を設定した。教員が互いに授業を参観し，授業の4つのステップにおいて授業者の工夫している点を学び合うことにより，教員全員の指導力向上をねらいとした。参観後は，参観者が授業観察シートに教師の働きかけの様子や生徒の学びの姿について感想を書き，授業者に伝えた。

### (2) 家庭生活習慣改善（記名コメント追加）の取組

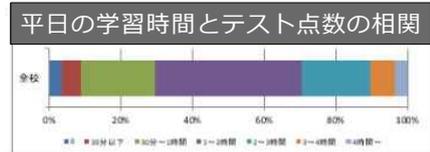
桑折町「学びのスタンダード」推進協議委員会の協力を得て，東北大学加齢医学研究所の川島隆太先生による講演を全校生徒を対象に実施した。メディア接触時間と学習効果の関係や睡眠時間と学習効果の関係について学び，生活習慣を向上させるきっかけをつかった。また，中学校でも全校生徒対象に同様な実態調査を行い，具体的なデータを教師及び生徒に示すことにより，生活習慣の改善を意識させた。

### (3) 推進地域への情報発信

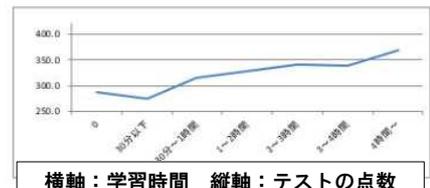
推進地域での情報共有を図るため，各校の研修主任が連携し，授業研究会等の取組をまとめた研修だよりを発行して，町内の小・中学校，幼稚園への配付により情報共有を行った。



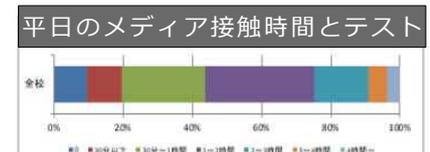
時間割に互見授業の予定を書き込む



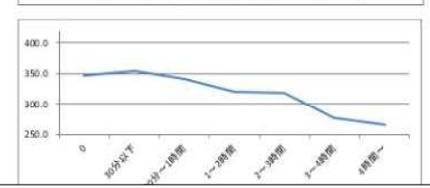
平日の学習時間とテスト点数の相関



横軸：学習時間 縦軸：テストの点数



平日のメディア接触時間とテスト



横軸：メディア接触時間 縦軸：テストの点数

## 3 推進協力校の取組内容

### (1) 現職教育の研究内容との関連を図る

「授業スタンダード」を受け，各学校の研究主題との関連を図りながら主体的・対話的で深い学びの実現に向けて授業研究を進めた。授業研究においては，①単元計画と課題設定の工夫，②思考・判断・表現を促す対話的な学び合いのコーディネート，③深い学びにつながるまとめと振り返りに重点を置いて実践を累積した学校が多かった。ペアやグループ学習の必要性を共有・認識しながら，ねらいに迫るような学び合いになるように場に応じた話し合いを設定したり，教師が見取を基に「切り返し」や「確認」の言葉かけするなど，教師のコーディネートの重要性を再認識した。「授業



カードで振り返る児童



ペア学習



グループ学習



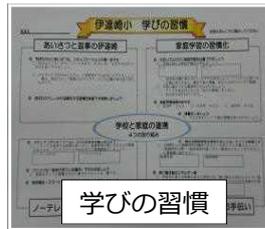
互見授業



机間指導での見取り

(様式1)

スタンダード」との関連を指導案に明記したり、児童用の「振り返りのさしすせそカード」を活用して習慣化をねらったり、「互見授業参観シート」で授業を見合ったりするなど、授業力の向上に努めた。



学びの習慣



学習カード

## (2) 「家庭学習スタンダード」の活用を図る

### ① 「家庭学習の手引き」の作成と自己マネジメント力を育てるR-PDCA

低・中・高学年ごとに「家庭学習の手引き」を作成して各家庭に配付したり、家庭での生活や学習を見直すための「学びの習慣」や「学習カード」を活用したりした。

### ② 自主学習ノートの掲示と展示会

教室の後方の掲示板に自主学習ノートのコピーを掲示して称賛のコメントを記したり、最後までやり終えた自主学習ノートを廊下に展示したりして、学級内で互いのノートの良い所を見合い、次の学習の参考になるようにした。また、個別懇談の際には待合室に自主学習ノートを学年ごとに展示し、閲覧した保護者が児童への励ましのメッセージをノートの表紙に貼付できるようにした。保護者は、我が子だけではなく、複数の児童に向けてメッセージを書いており、児童の自主学習への意欲が一層高まった。



自主学習ノートの交流



自主学習ノートの展示の様子

## 4 3年間の取組から見えた成果と課題

### (1) 成果

- 「授業スタンダード」を基に現職教育のテーマを立ち上げ、授業づくりを行ったことで、児童生徒の主体的な活動が増えた。授業を構想・実践するために深い教材研究が必要となり、教師個々の授業力が向上している。特に、教科の垣根を越えて生徒の深い学びをイメージ・共有し合い、他教科の教師とも活発な意見交換ができています。
- 研究授業や互見授業などを通して、他の教師のグループ学習の仕方を参考にしてコーディネートするなど授業力を向上させることができた。全校体制で同じベクトルで取り組むことにより、相乗効果が期待できる。
- 児童生徒の姿を想起しながら、課題設定の仕方を工夫した授業実践が多く見られるようになった。事前及び事後の授業研究協議会では、児童の実態に添い、発問の言葉の吟味や、めあてとまとめの整合性などについて活発な議論が繰り広げられるようになった。
- 家庭生活習慣改善（自己マネジメント力向上）の取組から生活習慣を見直すことで、家庭学習の充実（学習時間、習慣化）につなげることができた。（気づき、きっかけ）
- 町内各校の研修便りの交流により、互いの実践研究の内容が再確認できた。また、他校の取組も参考になり、互いの授業改善につなげることができた。

### (2) 課題

- タテ持ちを実施する場合は、福井県のような学校あげでの指導体制づくりが必要であり、タテ持ちを担当するすべての教師が、生徒の理解に基づく信頼関係の構築が大切である。また、担当する学年の生徒全員に授業を通して関われないもどかしさを感じた。
- 家庭学習の取組には二極化の傾向がある。個に応じた具体的な支援が必要である。
- 互見授業の円滑な実施のために、空き時間の活用や補欠体制の強化が望まれる。担当する校務のバランスを考慮しながら、さらに校務のスリム化を図る必要がある。